

## 科名 13期ミュージアムへ行こう 4



テーマ名 「昭和 100 年記念 あの頃は  
～栖風・魁夷・又造らが起こした昭和の風」

### 鑑賞会

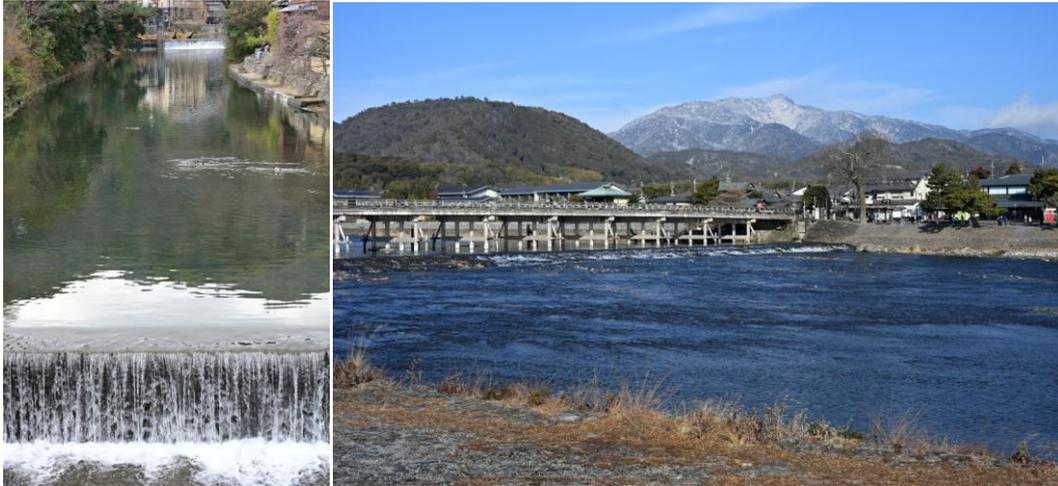
実施日付 2026年2月10日(火) 9:50 阪急嵐山駅前集合～自由解散

場所 福田美術館 [京都・嵯峨嵐山 福田美術館 -FUKUDA ART MUSEUM-](#)

いよいよ最終回になりました。今回の美術展については事前学習や講義はなく資料もありませんので、ページ数が増え恐縮ですが、写真を主体に報告します。撮影 OK の作品が多くできるだけ掲載するようにしましたが、点数が多いので作者や題名は割愛させていただきます(ご興味のある方は福田美術館 HP 等をご確認下さい)。作品の写真は展示に近い雰囲気の色調にまとめました。



阪急嵐山駅 駅前の集合場所に全員集合



定番の大堰川分流と渡月橋に残雪の愛宕山



渡月橋を渡り大堰川に沿って福田美術館へ向かう



徒歩約 11 分？で福田美術館に到着



福田美術館入口ロビーから趣ある階段で展示会場へ

## ごあいさつ

1926年から1989年への64年間に及んだ昭和という時代に寄せる感情は人それぞれでしょう。戦争と復興、高度経済成長、バブル景気……苦しみも安らぎも、貧しさも豊かさも内包し、激動と変革が交錯していた、日本にとって本当に特別な時代でした。

そして、激動と変革に向き合っていたのは、政治や経済、社会だけではなくありません。美術もまた、昭和という時代の風とは無縁ではいらなかったのです。明治・大正を生き抜いてきた竹内栖鳳、横山大観や川合玉堂ら長老たちが円熟期を迎えていた戦前、厳しい時局に画家たちが直面せざるを得なかった戦中、東山魁夷や杉山寧たち、若い世代が日本画の未来へと前進していった戦後など、昭和の美術は、時期ごとに全く異なる世界を見せていました。

2026年は、昭和元年から数えて満100年となります。この記念すべきタイミングを迎えて、当館では昭和の64年間に描かれた作品、100点を選び抜きました。今日の社会の礎となった、昭和という時代の風を受け止めた画家たちが描き出した豊かな世界。100点の作品を通して、慕わしくも懐かしく、意欲と熱気に満ちたあの特別な時代の風が、嵐山に吹き渡ります。

最後になりましたが、本展覧会を開催するにあたり、ご協力いただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

# GALLERY 1

## 第1章 昭和の風 ～戦前・戦中～

画家たちは、自身の創作で風を起こしつつ、昭和という時代の風を受けて生き抜きました。しかし、その風向きは戦前・戦中では、相当に趣を異にしています。

戦前は日本人の暮らしの様式がまだ和風であり、床の間や座敷を飾るために、掛軸や屏風が求められていました。慶事などの際に、特別な画帖を誂えて贈ることもしばしば行われた時代です。一方、戦中には日本の勝利を願い、富士山や神社、八咫鳥のような信仰の対象が数多く描かれ、芸術にも戦争の影響が色濃く表れるようになりました。

戦前・戦中に、ここ京都で一、二を争う高い人気を誇った橋本関雪は、終戦の年の2月に逝去した画家。世相と真摯に向き合い、「戦時を描く必要があるならば自分に依頼を、そして、その分だけ若い作家には自由な学びの機会を……」と訴えた彼が、様々な想いを託した晩年の作品も、特別に展示いたします。







## GALLERY 2

### 第2章 昭和の風 ～戦後～

戦後の日本画には、戦前の画家たちが思ってもいなかった逆風が襲いかかりました。「花鳥風月のような、旧来の価値観を払拭できていなかった日本画を珍重していたから戦争に敗けたのだ」という「日本画滅亡論」が声高に唱えられたのです。

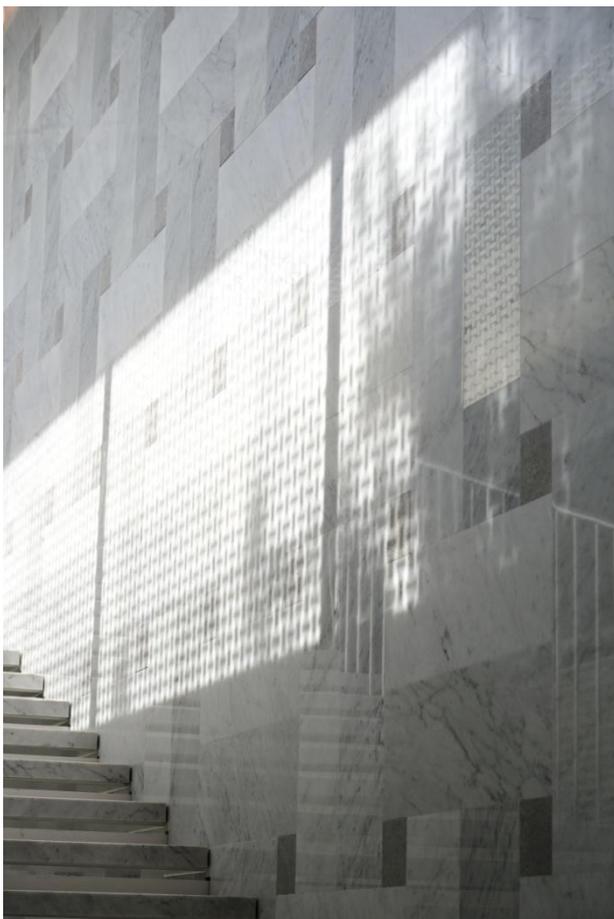
青年、壮年の画家たちは、この逆風に立ち向かうことを余儀なくされました。戦後に日本画で一般的になった、絵具を厚く塗り重ねて描くスタイルは、この時代に洋画に対抗して工夫されたもの。厚塗りだからこそ可能な、重厚な色調を駆使して、東山魁夷は欧州風景を、杉山寧はスフィンクスを、徳岡神泉や高山辰雄は心象を託した花鳥や人物を表現し、画壇に新たな風を吹き込みました。琳派などの伝統美に着目した加山又造も、自ら新しい風を吹かせ、時代の旗手となった1人です。世相を映しながら吹き続けた、あの頃の風をご体感ください。







閑話休題 館内から嵐山景色を望む



閑話休題 館内壁面の光と影

## GALLERY 3

### 第3章 池田遙邨と富田溪仙 ～嵐山にも昭和の風が吹く～

嵐山は、多くの人々の心を惹きつける日本有数の景勝地。このギャラリーでは、嵐山の風光を愛した2人の画家で、あの頃をご紹介します。

池田遙邨は、岡山・倉敷出身の画家。竹内栖鳳に学んで戦前から頭角を現し、戦後は京都画壇を代表する重鎮として文化勲章も受章しています。旅を愛し、全国を歩いた彼が最も好んだのが嵐山の風景で、元日の朝から写生に訪れるほどでした。

富田溪仙は、遙邨が先輩画家として最も尊敬した画家。福岡・博多に生まれ、京都で都路華香に学んだのち、富岡鉄斎を慕って風趣あふれる画風を展開し、横山大観に激賞されるほどの芸術を完成させました。嵐山を愛し、アトリエを構え、二尊院の墓に眠っています。

溪仙は戦前、遙邨は戦後に、他の画家とは違う美意識を発揮した代表的作家。彼らの作品に満ちている風韻は、実際に見なければ理解しにくいものです。あの頃には確かにあったけれど、平成、令和を経て、昭和が100年を迎えた今ではもうほとんど失われた、純朴で、静かで、豊かな芸術世界がここに 있습니다。



## 後書

大きな美術館から個性あるキラリとした美術館まで楽しませていただいた 1 年間でした。美術素養はあまりない中でもそれぞれの美術展の展示を堪能できました。解説いただいた講師の方々に御礼申し上げます。また毎回きめ細かいご対応とご配慮をいただいた水田 CA 様、千種 CA 様にも改めて御礼申し上げます。1 年間楽しく過ごせました田口委員長、クラスや班の皆様にも感謝いたします。機会があればまたお目にかかることを楽しみにしています。（広報担当 1 班）



お世話になりました水田 CA 様、千種 CA 様 <ありがとうございました>



(余録) 1 班は福田美術館近くの松ヶ枝でお別れ会を開催しました。